

イエス様がこの「ムナのたとえ」を話された時、イエス様は旅のゴールであるエルサレムに近づいておられました。そして人々はそれに伴って「神の国はすぐにも現れるものと思っていた」のです。それこそイエス様がこのたとえを語られた理由でした。たとえの初めで「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった」と言われているように、イエス様の旅は実はエルサレムで終わりではなく、十字架の死から復活された後、天に上られるのです。そして父なる神様から王位を受けて帰ってこられる。その時に「神の国、神のご支配」は完成するのです。私たちも御国の到来を祈り求めています、同時に完全な仕方では神の国が現れるまでにはまだ時間がかかるかもしれないということを覚悟していなければなりません。ではイエス様が再び来られる時まで、私たちはどのように生きるべきなのでしょうか。イエス様はそのことをこのたとえを通して教えてください。

主人は旅立つ前に 10 人の僕に 1 ムナずつ預けて「わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい」と命じました（1 ムナとは当時の 100 人分の給料に当たる）。それぞれの僕に同じ金額が与えられていることを考えると、これはキリスト者一人一人に同じように与えられている「信仰」あるいは「福音（神の言葉）」のことだと解釈できます。すなわち、主であるイエス様は私たちが信仰を用いて働くこと、福音を用いて伝道していくことを望んでおられ、その実りを期待しておられるということです。10 ムナもうけた僕に主人は「良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう」と言いました。5 ムナもうけた僕にも 5 つの町が任されることになりました。自分の力に応じて小さな事に忠実に仕えた僕たちにはさらに大きな報い、王の国の一部を治めるという光栄な務めが与えられるのです。

しかし主人から預けられた 1 ムナを布にしまっておき、何もしなかった僕は「悪い僕だ」と言われ、持っていた 1 ムナさえ取り上げられ、10 ムナ持っている僕に与えられることとなります。「言うておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる」と言われている通りです。

しかしさらに厳しい裁きを受ける人々がいます。それは主人が王位を受けるために旅立った後に、使者を送り、「我々はこの人を王にいただきたくない」と言わせた国民です。その人々は王すなわちイエス様が帰って来られる時、「敵」として裁かれ、滅ぼされてしまうのです。

イエス様はこのたとえを私たちへの警告として語っておられます。私たちは熱狂的あるいは楽観的な仕方では、神の国がすぐにでも現れ、自動的にすべての人が救われるというように考えるべきではありません。イエス様が王として天から帰って来られるまでにはまだ時間がかかる可能性があります。その期間、私たちがイエス様に対しどのような態度を取り、生きるかということが、最後の裁きにおいて決定的な重要性をもっているのです。その意味でイエス様が帰ってこられるまでの今の期間というのは、私たちのイエス様への信仰、忠実さが試されるテスト期間とすることができます。私たちが為すべきことは、イエス様を憎み、その支配を拒むのではなく、イエス様を愛し、イエス様を自分の王として受け入れることです。そしてイエス様からそれぞれに与えられた信仰や福音を用いてイエス様の益のために、イエス様が喜ばれることのために働いていくことです。そのようにして小さな事にも忠実に仕えるならば、私たちも終わりの時イエス様から「よい僕だ。よくやった」とほめていただき、さらに豊かな報いをいただけるのです。